

現代中国における農業の集団化と 「共同関係」

内 山 雅 生

1. 問題の所存

現代中国農村が、「改革・開放」というスローガンの下に大きく変貌して時久しい。そして、農村にはかつての社会主義中国を代表した「人民公社」に見られる農業の集団化の様相もない。果たして中国革命を経て実現した集団化とは何であったのかと問い直さざるを得ない。

筆者は、「中国農村慣行調査研究会」の一員として、1990年より95年まで三谷孝一橋大学社会学部教授を団長とする調査研究グループに参加して、戦前期に南満州鉄道株式会社（満鉄と省略）調査部が調査地とした農村を再調査する機会に恵まれた。⁽¹⁾ 現在収録したインタビュー記録を整理している過程にあるが、調査研究の中間報告として、昨年春に成果の一部を「近代化と農村社会」⁽²⁾として発表した。そこでは戦前期の華北農村に存在した慣行＝「共同関係」が、中華人民共和国成立後に至っても、名称を変えながらも農村社会における役割を変えずに存在したことを、農作物の見張りである「看青」や居住地区の共同監視である「打更」を例に取り上げて説明した。しかしとり上げた「共同関係」は、農業生産に直接関わったものではなく、村落統治の範囲で機能したものであった。その限りにおいて、本稿は前稿「近代化と農村社会」の続編でもある。

ところで前稿でも指摘したように、戦前期の華北農村には、農業生産に直接関与する「共同関係」は、「看青」や「打更」などの村落統治、つまり村落防衛に関する慣行と比較するとその存在意義は相対的に低いとされていたが、後述するように「換工」や「搭套」という慣行の存在は、各種の農村調査にしばしば指摘されている。

過去の農村調査でも、華北調査における搭套については、その存在の特異性が指摘され

ている。例えば1941年に興亜院華北連絡部の委託を受けた農林省農事試験場技師二瓶貞一および松田良一両氏の実施した農具の調査である『北支の農具に関する調査』では次のように紹介されている。

「北支の河北・山東・山西三省の農家1戸当りの耕作面積は、平均20畝内外（約1町3反）といはれてゐる。また北支三省の馬・牛・騾・驢の役畜頭数は農家1000戸当り940頭で、1戸当り0.94頭になってゐる。従って農作業の動力・労力は、人力と畜力とで充分であり、人力にはむしろ余裕がある。而して北支の作物は優良なる品種があるわけではなく、乾燥農業の特質として水や肥料も不足勝ちである。また作物の病虫害の駆除も殆ど行はれない。ただ営々として働く人力と、忠実無比なる役畜の余って農業が維持経営されてゐるといっても過言ではない。

次に10畝以下の耕作者は労力の余るため、中農・大農に出掛けて労力を提供する。また小農は勿論単独では役畜を所有し得ない。従って日本には珍しい役畜の共有または貸借が、小中農間に広くおこなはれてゐる。之等の共有または貸借は主として親族間および朋友間に限られてゐる様であるが、支那の農民の一つの長所と考へる。」⁽³⁾

農業生産力の低位等いささか一面的な評価が与えられたむきがあるが、第一に、小規模経営農家における過剰労働力の存在を前提として、小規模農家が大規模農家に対して労働力の提供をすること、第二に、小中農間における役畜の共同飼育＝共同保有、および貸借関係が、親族間および朋友間に存在するという指摘は、現在でも中国農村におけるネットワークを考察する上で貴重なヒントであろうと思われる。

そこで本稿では、解放前の農村における「共同関係」、特に搭套を中心とした農業生産に関する「共同関係」の実態がいかなるものであるのか、さらにその「共同関係」が解放後の中国農村における農業の集団化といかなる関係を持っていたのか、農民の視点から中国革命を考察するうえから、筆者が実施した現代中国における農民へのインタビューを紹介しながら検討してみる。当然この作業は、現代中国の農民自身に農業の集団化の意味を問い直す作業でもある。

2. 「共同関係」と、農業の集団化の開始

かつて旗田巍氏はその「共同体」研究の中で、「看青」や「打更」などの「多数の農民の集めた協同」が華北農村に存在する一方、農業生産に関わるような「共同体」的關係は、搭套等のわずかな農業慣行が、「二、三の農家の相互扶助的な協同」としてのみ存続していたに過ぎないことを指摘した。⁽⁴⁾

そこで筆者は例え二、三の農家間といえどもなぜ相互扶助的な「協同」が華北農村において実施されたのか、満鉄の研究員として旗田巍氏自身も直接参加した戦前期の農村調査である『中国農村慣行調査』に基づいて、北京市郊外の順義県沙井村における搭套の具体像を検討した。⁽⁵⁾

その際に、戦後日本の農村調査をもリードした社会学者の福武直氏の搭套や換工についての概念規定を取り上げた。

福武氏によると、換工とは帮工ともいわれ、「先ず賃金を出して雇用せず助力をうけその助力に対して同じく無償で労力を返す」ことであり、「常に同一の家同志に限定されるのではなく、機により必要に応じて助けあふ」ものであり、「自然換工をする家は定まって来る」が、「固定するとは限らず、また通例二、三家程度に止り、それ以上の多数の家が協力する一つの組織となることはない」という。

これに対して搭套とは、農繁期に役畜の不足を補うものであり、「一頭しか所有しない農家が同様な条件の農家と相互に融通し合ひ共同に耕作するといふ協力の仕方」であり、他に「一定の家が農具の貸借をお互いにする合具といふ様な協力」もある。⁽⁶⁾

しかし、福武氏のとらえ方は旗田氏の捉え方と共通するかのように見えるが、いくつかの問題点を内包している。そこで筆者は、沙井村の事例から、第一に福武氏が換工は「非合理的な親密なる協力感情を前提として始めて起こり得るのであるために、打算的合理的傾向のあるところには行はれ難い」と断定したこと、第二に搭套が「金持ちと貧乏人との間に行はれる」というケースは「応答者の考へ違いであろう」と断定し、「耕作畝数その他の条件が略相等しい農家間に成立するので、同族や隣人の間に生ずるものとは限らない」と結論づけたことを批判した。

つまり搭套をめぐるのは当該期の農村におけるさまざまな社会的要因が作用しあい、旧来の存立の枠を超えた関係が成立する様子をまとめ、福武氏の中国社会そのものに関するとらえ方が、中国農村に関する具体的な分析に基づくのではなく、中国農村に存在する共同性に関する限られた事例を、日本農村との単純な比較に止めてしまったことに起因していることを批判した。⁽⁷⁾

ところで旗田氏同様に戦前期自らも中国で農村調査に参加した経験を持つ西山武一氏は、1969年に出版されたその著書『アジア的農法と農業社会』の中で、農業の集団化の起点としての互助組の成立にあたって、換工等の農業慣行が契機とされたことを次のように指摘している。

「互助組には、(1)5～10戸の農家が農繁期に臨時に組織する初発的な形と、(2)十数戸の農家が通年の農作業全体にわたって組織するより発達した大型通年互助組と、二種類ある。互助組を発達させた社会背景として、抗日戦および国共内戦の過程に、労働力、農具、役畜が著しく損傷して、戦後生産力回復の障碍になっていた事情がある。

臨時互助組は中国に從來存在した換工の慣習といくらも違ってはいない。『各家は各家の譜を奏す』のであり、ただ農繁期には『我は汝の作業を加勢し、汝は我の作業を加勢する』臨時協業の組織によって労働効率を高めるのである。

新しい互助組が古い換工と違う点の第一として計工記帳があげられる。すなわち古来の換工では人情が重きを成し、互に手弁当で助け合っていたのであるが、その結果はかえって婦女老幼等の弱い労働力は換工の範囲から排除されることになった。計工記帳はこの人情的な換工を打算の基礎上に再編し強化する契機であって、各人の出役は体力、技能をも加味して標準工に換算され、期末に清算して、差額を労賃として授受するのである。これによって一方労働力の等価交換（同工同酬）が確保されて労働能率の高め、他方質を異にする労働力が遠慮なく互助組に参加することができるようになり、各労働者の質に応じたの分工も展開できるようになる。

互助組では労働力が互助する外に、役畜農具もまた有無相通じて協業に参加する。これらは言うまでもなく或る条件の下では、独占された生産手段として、『資本』になるものであるから、人間労働と畜力労働とをどんな比率で交換するかには別の問題が存在する。」⁽⁸⁾

その後の互助組についての西山氏の説明は、通年互助組、さらに農業生産合作社の登場に論及している。ただ農業の集団化の原初形態としての臨時の互助組の説明については、前半部分の社会的背景については一般的説明に終わっているが、後半部分で互助組の結合論理が從來からの農業慣行である換工を軸としているという説明は注目すべきであろう。むろん先ほどの福武氏の換工と搭套の概念規定によれば、西山氏の説明には換工のみならず、事実上の搭套の内容が含まれていることも否定できない。

しかし、中国の土地改革をマルクス及びレーニンの文献からの論及を試みている西山説からしてみれば、互助組に始まる農業の集団化はあくまで「社会主義への媒介環としての協業」という、いわば「協業の原理の広範な適用」の問題として捉えられている。西山説においては、土地改革以後の農業の集団化は、社会主義建設のための当然の帰結であり、その限りにおいてあくまで理論的説明に重点が置かれて、集団化の実態を究明するという問題視角から検討されてはいない。従って、なぜ中国共産党の指導の下に農民は、換工の慣習を超えて社会主義的集団化に参加していったのかという問題は始めから検討対象から

除外されていることになる。

互助組が農村社会における伝統的な慣行の一つである換工に由来してきたということは、最近の研究でも概括的に論及されている。

例えば、この十余年積極的に中国農村を調査し、中国農村社会の基底部に「生活共同体」が存立してきたと主張する石田浩氏は、自ら調査した上海市近郊農村の一つである奉賢県唐家村での互助組の成立過程を、農民からのインタビューを基に豊富な統計資料を添付して次のように説明している。

「奉賢県では、解放前の『伴工』（相互扶助、一般的には換工と呼ぶ）を基礎として、解放後、互助組が自然発生的に成立した。1951年には臨時互助組が、1,949組成立し、参加農家は2万1,864戸（全農家戸数の38.49%）であった。1952年春には僅か24組、215戸（0.38%）であったが、1952年には848組、8,379戸（14.25%）に増加した。

ところが、唐家村での互助組は、自然発生的には生じなかった。本村は牛や牛車、風車、労働力を比較的多く所有し、他村に比較して農業生産条件がよかったので、農民は互助組を組織する必要を感じなかった。そのため、村幹部も互助組を組織することに積極的ではなかった。1952年には本村に1組の互助組が成立しているのみであった。ところが、他地域ではすでに互助組の組織化が進展していた。1953年に奉賢県第6区会議が開催され、他地域に比して本村の互助化の遅れていることが指摘され、村幹部は会議から帰ると、早速互助化の運動を起こした。そこで、村幹部は自然村を単位として上から互助組を組織することとした。」

「以上見てきたように、互助組は各自然村のベースにして組織されている。大きな自然村であればその中の同姓（同族）をベースとして、小さな自然村では他の小さな自然村と合併して組織されていることが分かった。（中略）しかし、以上のような制度化された互助組が農業生産においてどのように機能したのか。この点については積極的な応答を得るができなかった。なぜならば、互助組の実際の運用において、誰に協力を依頼するかは各農家に任されており、農家はあえて互助組に参加するまでもなく、これまで村内における人間関係を通じて互いに協力しあってきた。以上の理由により互助組の必要性はあまりなかった。農民が互助組に参加しようとした積極的な理由は別の所にあった。すなわち、互助組に参加することによって国家への食糧販売ノルマである統購統銷の割当料（交售糧）を減らしてもらうことにあった。」⁽⁹⁾

互助組成立に関する石田氏の説明の第一の問題点は、唐家村はその農業生産条件が恵まれており、あくまで自然発生に互助組が成立する必然性を持たない特種な村であり、上部機関からの政治的指導によった組織化がなされたということである。この点は互助組が自

然発生的に成立した奉賢県の他地域の社会状況との比較から説明がなされなければ、互助組の必要性がないと断定できないのではないかという疑念を残すことになる。

第二の問題は、唐家村において互助組の組織化を必要としないほどの「村内における人間関係を通じて互いに協力し合う」関係が存在したことである。当然石田氏の「生活共同体」論からすれば、「同族」「同郷」の結合により互いに協力し合う人間関係が成立するということになるのだろうが、当該村民がいかなる実態を伴って協力し合っていたのか、さらにその協力は近隣の他村とはいかなる違いを持つのか、また共通性を保有するのか、その実態が不明のまま、農業生産の豊かさのみで説明が終ったことである。

第三の問題点は、政治的に上部機関から互助組の組織化を強制された農民にとって、国家への食糧販売ノルマの軽減というメリットが存在したことである。このことは一見直接的には農業生産条件の有利さとは無関係のように見える事柄であるが、互助組に参加することの政治的意味という点ではあくまで上級機関からの指導という枠内にあり、他村の互助組農民と同一の立場にある。ということは「互助組の必要性はあまりなかった」所と互助組を必要とした所の違いを越えて農民にとってもメリットなる訳で、強制されたか、自然発生的かの別を越えた次元での論点であり、互助組を不必要とする理由の説明にはならないということである。

そこで行論の関係から、現代中国における農業の集団化の原初形態としての互助組が、いかなる結合論理を軸として結成されたのかということに限定して検討してみよう。

まず筆者が収集した互助組の結成に関する農民自身の理解を紹介してみる。

ところで5年間にわたる農村調査の成果は、いずれ報告書として公刊する予定でいるが、まだ資料整理の段階にあるのでインタビュー記録自体も公表されていない。そこで本稿では互助組に関する比較的重要なインタビューを要約にとどめることなく全文紹介する。

むろん農民へのインタビューは、筆者の語学力をはるかに超えた作業なので、共同研究者である中国南開大学歴史系のスタッフの協力のもとに実現した。⁽¹⁰⁾ 本稿で紹介するインタビュー記録は、調査当日筆者が録音したカセット・テープを、中国側スタッフの手により中国語の応答文として再現されたものを、筆者が日本語に翻訳したものである。応答文の構成は、戦前期に満鉄調査部が実施した『中国農村慣行調査』（以後『慣行調査』と略称）⁽¹¹⁾と同様の表記方法を採用し、

・ 筆者の質問 —— 応答者の回答

という表記方法の繰り返しとなったこととお断りしておく。

3. 華北農村における互助組の成立と「共同関係」

(1)調査村の概要

①北京市順義県沙井村

順義県沙井村は、北京の北東約30キロに位置し、北京と承德を結ぶ京承線の沿線である。現在は北京市の行政区に含まれて降り、さながら北京の衛星都市として近郊農村の様相を呈している。戦前、1940年に満鉄が調査した時には、戸数70、人口数400で、村民の多くは農業に従事していたが、自家経営分で生活を維持することは厳しく、長工や短工として労働したり、出稼ぎや小商人としての収入を確保していた。⁽¹²⁾

再調査の沙井村は、1986年段階で、戸数160、人口500であったが、1990年段階で、全村213戸、耕地面積400畝、請負制が主流の現代中国においては珍しくなった集団経営方式を1987年より実施し、そのほとんどが集団農場によって経営されている。ところが1994年の調査時には、村民の人口には変化はないものの、北京の近郊農村ということもあって貸家をする者が増えたのを契機にして、外来戸（外村人）が200余名も増加し、治安の悪化が懸念されていた。

順義県に多い農場は、以前の人民公社のような集団経営とは直接関係ない。むしろ都市近郊農村として男子壮年労働力が工業生産に関与しており、工場に通えない老人や婦人労働力を吸収し、あくまで食糧の自給を図るための農場経営であり、都市近郊農業の特色を示している。

②山東省平原県後夏寨

平原県は、山東省の西北部に位置し、北京から約360キロ、済南から90キロの所に位置している。後夏寨は平原県中心部から西南に3キロの所にある。満鉄調査時の後夏寨は、恩県に所属し、戸数140戸、人口580人、耕地1,800畝。主要作物は綿花、粟、とうもろこし、高粱、小麦、その他の雑穀などで、生産量は低く、恩県の中でも有数の貧窮地帯であった。⁽¹³⁾

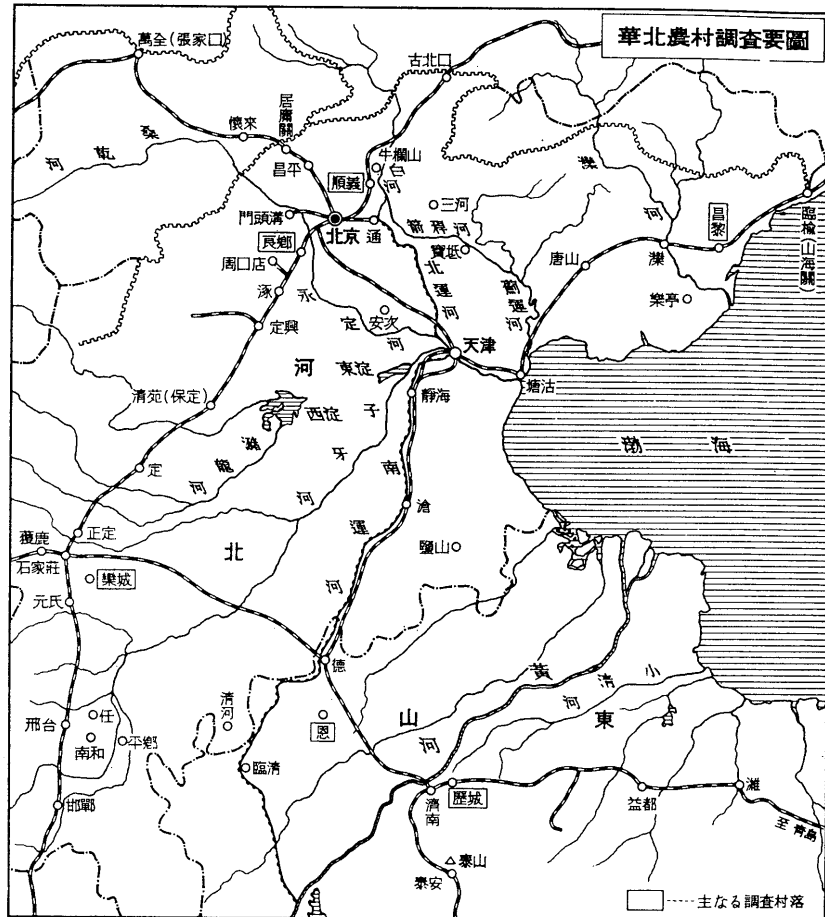
再調査時の後夏寨は、平原県に所属し、戸数189戸、人口890人、耕地1,850畝の中で糧田800畝、綿田700畝、果樹園300畝。綿花、小麦、とうもろこしを生産しているが、現在では請負制の実施により、りんごを中心とした果樹栽培や養殖業が盛んであるが、同族を中心とした旧来の社会関係を強く残している農村地帯でもある。⁽¹⁴⁾

③河北省樂城県寺北柴村

樂城県は石家荘市の東南25キロに位置し、寺北柴村は県城の東北2キロにある。満鉄調

付図、調査地の位置

『中国農村慣行調査』掲載の地図より



査時には、140余戸、人口710で耕地面積700畝であったが、⁽¹⁵⁾再調査時には、戸数352、人口1,409、耕地面積2,079畝で、主要作物は小麦、綿花、とうもろこしである。石家荘市の近郊農村であるが、沙井村ほど都会化の波にのまれてはいない。しかし近隣の村とも違って、さらに呉店村とはまったく逆で、同族的結合も含めて極めて村としての求心性の弱い村としての特徴の兼ね備えている。⁽¹⁶⁾

(2) 調査村における搭套と互助組

① 沙井村

1990年8月の第一回調査時には、筆者もまだ搭套の持つ意味を十分に理解していなかった。幹部の張樹徳氏へのインタビューでも次のような応答しか得ることができなかった。

(調査番号Ⅰ－１ 張樹徳, 調査時1990年8月21日午前, 以下同様に表記)

・搭套については——どんな意味か？

・生産隊の中での相互扶助は——大体わかった。搭套は解放後, 初級合作社の時代まではあったよ。互助組のことだろうと思う。人民公社ができる前では, 生産隊もなく, 互助組が搭套をしていた。もし農家に家畜などの生産用具がない場合, 労働力と畜力との交換をしていた。

・搭套は兄弟とか友達とか, それとも村の人同志とか, どんな間柄で成立するのか——家族に限らない。かつて本村には4組の互助組が搭套していた。私の所属した互助組は, 張姓, 呉姓, 李姓によって構成されていた。搭套は実際は互助組のことだ。

当時は筆者の問題意識の希薄さもあって, 張氏の言う「搭套は実際は互助組のことだ」の真意が理解できなかった。

またもと幹部の李広明氏からも次のような簡単な答えしか返ってこなかった。

(Ⅰ－２ 李広明 1990年8月22日午後)

・搭套は知っているか——一頭の家畜を何人かで使うことだ。お互いに助け合う。

・搭套をしたことは——ある。小麦を運ぶ時に助け合った。

・誰と助け合ったのか——村の人間どうしなら, 頼まれたら手助けする。

・いつごろまであったのか——互助組の頃か, 人民公社時代にはなかった。

ところが4年後の1994年の第二回調査時には, 筆者の搭套についての問題意識も多少とも煮つまってきており, 張氏や李氏から次のような応答を得ることができた。

(Ⅰ－３ 張樹徳 1994年8月23日午前)

・あなたが朝鮮戦争に参加していた頃, 村には互助組が成立していたと思うが, 合作化の状況を知っているか——この村にはいなかったの, 少ししかわからない。

・互助組はどのようにして成立したのか——53年にこの村には二つの互助組が成立した。南の十数世帯が一つの互助組を作り, 北の十数世帯も互助組を作った。やがて全村あげて互助組に参加した。

・互助組が成立していた期間は——1953年から54年までで, 二つの初級社となり, やがて55年に高級社ができた。

・初級社の時の参加農家数は——第一社は20余戸, 第二社も20余戸。

・高級社には皆参加を希望したのか——したくない者はいなかった。互助組等の基礎があるので反対する者はいなかった。ただ李伯祥は上中農であったので, 自分の生産条件が良く, 初級合作社に参加した時のロバを連れて帰り, 参加しなかった。後に幹部が人民公社の長所を宣伝し, 最後に

参加させた。

・李伯祥は健在か——元気だ、今年で75歳になる。

・インタビューに応じられるか——ほけている。

(中略)

・ところで搭套を知っているか——（笑いながら）解放前、まだ互助組がなかった頃、あなたの家にロバがいて、わが家にもロバがいるが、働き手が足りず耕作できない時に、両家が一緒に耕作することだ。あなたの家の耕作を終えたら、私の家の耕作をするという風に。これが搭套だ。

・搭套には二頭の家畜が必要か——そうだが、必ずしも二頭の家畜があるとは限らない。あなたの家には車があり、私に家畜がある場合も、搭套することができる。

・この他にはどんな相互扶助があるのか——ここでは「互相幫助」と呼ばれ、収穫時の手伝いがある。あなたの家の収穫の時私が手伝い、私の家の収穫時にあなたに手伝ってもらうことだ。

・互助組ができたなら互相幫助はなくなったのか——そうだ、互助組で協力したので、必要なくなった。

・では互相幫助は相手が特定の人たちの間に限定されている関係であるのに対して、互助組は協力する相手が増えたというぐらいの違いか——区別はつかないだろう。互助組には正、副の組長がおり、農民を仕事によって分け、仕事の開始や終了を調整している。

・では幫忙の考え方が互助組に拡大したと考えて良いのか——そうだ。互助組の成立範囲はもっと広い。

・互助組の中では組員同士の喧嘩もあるから、共産党の指導が重要なのか——互助組では正、副の組長が党の指導を得ており、大衆の思想も良い。皆がお互いに助け合うことの意味を知って、労働力が多ければ生産量も多くなることを認識している。

・幫忙の時には喧嘩をしたら分かれば良かったが、互助組や合作社では、幹部は組員や社員の対立をどのように調整したか——個人間に矛盾が起きた場合には、村の治保会が解決する。もし生産に関する問題であれば、隊長が解決した。

張氏の応答のポイントは、第一に、前回同様に搭套が互助組となったこと、第二に搭套に見られる相互扶助の範囲が、互助組になると拡大したこと、第三に搭套は畜力の交換を前提として成立するが、車と畜力の交換なども協力の範囲に含み、結果としての相互協力を重視していることなどである。

(I-4 李広明 1994年8月23日午後)

・話は変わるが搭套を知っているか——例えばあなたが家畜を持っていて、私が車を持っていた

ら一緒に使うことだ。そのような家畜の共同使用の他に、家畜と農具、さらに家畜の代わりに人力と農具の共同使用もある。

- ・搭套は親戚や友人の關係に成立するのか——この村の者同士であれば良い。
- ・解放前に誰かと搭套したことは——杜欽賢、杜世賢、趙文生と。我々四軒は、ひとつの互助組だった。解放前では搭套をしていない。
- ・では四軒が搭套をしたというのは、互助組成立前のことか、以後のことか——互助組でだ。
- ・解放前は四軒は搭套をしていなかったのか——していない。
- ・解放直後から互助組成立までの間は——搭套をする者はいたが、私は参加していない。
- ・互助組を作る時は協力できる仲間を自由に選べたのか——自由に組織できた。
- ・あなたがた四軒の階級成分は——皆貧農。
- ・貧農と貧農ではなく、中農同士が互助組を結成することは——ない、大事なのは一緒に仕事することだ、やっと一つの互助組が成立した。
- ・では互助組は貧農のための組織か——とは限らない。貧農も中農もいる。
- ・最初にできた互助組というのは——私が入っていた互助組が一番早い。
- ・その互助組に共産黨員は——黨員はいないが、私も他の者も幹部だった。私は治保、杜欽賢は民政担当だ。
- ・あなたは入党したことは——ない。
- ・では互助組というのは幹部たちだけで結成したのか——参加した者の中には幹部が多かったが、そうでない者もいた。
- ・他の互助組の成立は——他にも互助組が成立した。互助組でできた後、やっと合作社になった。
- ・では初級社ができた時は、村民はほとんどが互助組に参加していたのか——互助組に参加していない者もいた。村に初級社ができると、全ての互助組が初級社に参加した。ただし少数の農家は初級社にも参加しなかった。
- ・どうしてか——地主と富農は初級社に入れなかった。何軒かの貧農や下層中層のもいたが、思想上の落後分子だ。
- ・不参加の貧農や下層中層に対して幹部はどんな思想工作をしたのか——特別のことは必要ない。年末に公糧を納入する時、食糧庫は合作社に参加しなかった者からは受けつけなかったので、彼らは入社した方が有利だと判断した。
- ・高級社への参加は——皆参加したので、個別経営に止まる者はいなかった。
- ・初級社から高級社に変わる時、農民はどんなことを考えたのか——別に何も考えない。

- ・中には生産用具などが共有になるのでいやがった者がいるのでは——いない。
- ・50年代の歴史を勉強しているんだが、高級社ができてから短期間で人民公社に代わってしまうことがよくわからないのだが——ここでも高級社ができてからたった3、4年で人民公社が成立した。
- ・急激な変化の原因は何だろうか——何と言っても政府の命令だ。
- ・いくつもの村が集まって人民公社を作るんだから、農民にとっては仲の悪い村の者もいる訳だから、不安はないか——ここでも6村が一つの人民公社になった。公社ができると、この村の生産や収穫は全て公社の指示によった。収穫の分配も公社の言い通りにした。余りは公社のものとなった。農民にとって不安はない。

李氏の応答のポイントは、第一に、解放前後の搭套をめぐる事情についての理解が混乱していること、第二に、互助組には貧農のみならず、中農まで参加していること、第三に、互助組、初級社の段階でも未参加者が存在したが、彼らは思想上の落後分子として批判され、食糧倉庫の利用という利便を通じてプレッシャーが加えられていたことである。

また村の古老の一人である楊福氏から次のような回答が寄せられた。

(I-5 楊福 1994年8月26日午後)

- ・解放前に搭套は——搭套は私の家は何畝か土地を持っていた、あなたも何畝か持っていた時、わが家に家畜がいて、あなたの家に農具があつたら、一緒に種蒔き、田起こし、さらに収穫をする。
- ・解放前、誰かと搭套したことは——隣の張書氏と。
- ・搭套する時どんな農具を持っていたのか——私は車一台と、犁、相手はロバ一頭と鋤。
- ・解放後の搭套は——張書代と、杜維新の三軒で搭套をした。初めは搭套だったが、後に互助組と呼ばれた。
- ・杜維新も鋤などを持っていたのか——ロバがいた。
- ・三軒の搭套にロバが加わって生産は上がったか——そうだ。
- ・三軒の搭套はどのようなシステムで運営されたのか——土地の掘り起こしと収穫の時に協力した。その他の時は各自で農作した。
- ・三軒の搭套関係は、冠婚葬祭の協力にも結びついたか——めでたいことや不幸な時には、仲間として協力したが、行事には他の者も参加した。
- ・三軒が互いに協力する以外には、忙しい時に手助けをするのは親戚か——親戚や隣同士だ。
- ・互相帮忙という言葉は——知っている。あなたに事あれば私が手伝いに行き、その逆もある。
- ・互相帮忙と搭套の区別は——互相帮忙は相手が突然忙しくなり手助けをする。搭套は長期間、

固定した関係だ。

- ・合夥は——同じようなことだ。
- ・解放前には搭套や互相帮忙を除いて他の協力関係は——結婚式や葬式など、冠婚葬祭の帮忙は劳忙と呼ばれている。
- ・劳忙も親戚との間で行われるのか——親戚もあれば隣同士もある。
- ・その他は——ない。
- ・解放後搭套関係の三軒はどのくらい土地を所有したのか——私は18畝、張は10畝、杜は9畝。
- ・三軒の階級成分は——皆貧農。
- ・当時の搭套は貧農と貧農の間で成立したのが多いのか——そうだ。
- ・解放前には金持ちと貧乏人の間に搭套が行われたことは——ない。
- ・一般的には互助組は搭套の関係があるところのできたのか——だいたいそうだ。
- ・あなたの互助組は一番早く成立したのか、他の互助組は——知らない。
- ・初級社が成立した時には、互助組は皆初級社になったのか——そうだ。
- ・富農や地主は互助組に参加しなかったろう、初級社には——1956年に高級社が成立した時には村民皆参加した。
- ・初級社が成立した時に参加しなかった者はどのくらいで、どの階級成分の人か——10戸ほどで、大部分が地主と富農だったが、一部の中農と貧農もいた。
- ・地主と富農が参加しないのはわかるが、中農や貧農の一部が参加しないのはなぜか——初級社はいくまで自主参加だから。ある者は社をよく理解していないし、すすめられないので参加しなかった者もいる。
- ・未加入の者に対しては幹部は説得しなかったのか——高級社の時は動員したが、初級社の時にはしない。

楊氏の回答のポイントは、第一に搭套がそのまま互助組に移行したこと、第二に相互協力の範囲が、畜力の交換ということに限定せずに、農繁期における農作業の協力に拡大していることである。

またかつて筆者が拙著においてその父親や伯父たちとの搭套関係を分析しと楊慶余氏の場合は次のようである。⁽¹⁷⁾

(I-6 楊慶余 1994年8月27日午後)

- ・搭套を知っているか——何軒かの農家が一緒に農作業をする。解放前に父とおじ達、さらに私は兄弟達と一緒に搭套をした。

解放後は――していない。

・ 合作社の時には――合作社には参加した。先進的な人と後から参加する人がいた。私は後から参加した。

・ 高級合作社には――初級社には入っていた。父の高級社への入社は遅かった。村の幹部は父の生産力が高く、農業についての豊かな経験があるのを知っていたので、入社させた。保長の周燕も入社したから、父は自然に参加した。私の伯父達も皆入社した。

・ 伯父さんとは――楊源だ。父の名前は楊正、叔父は楊沢。

・ お父さんや伯父さん達の三人だけで一つの互助組を作っていたのか、別の人も加わっていたのか――別の人もいた。互助組の人数は多い。李祥林は互助組の組長だった。もう一人の組長は杜伯金で、十数戸が参加していた村一番の互助村だ。

・ 互助組には大小があるのか――李祥林には組織力があつたので、彼の力量で、大きな互助組となった。

・ 初級社に入る時には問題は起きなかったか――初級社には楊源は入れなかった。父は村の幹部だったが、地位は低かったので、やっと入社できた。村には二つの初級社ができた。東社と西社だ。我々の互助組の者は西社に入る者もいれば、東社に入った者もいた。周燕は東社に入ったが、後で除名された。私の父は皆に好かれていたので除名されず合作社に留まれた。その頃の入社には貧農や下層中層は必要とされたが、地主と富農は不要とされた。

楊氏の場合も、第一に搭套のイメージが畜力交換に限定されていないこと、第二に参加を拒否された地主・富農層の実態を語っていることが、回答のポイントとして上げられよう。

また解放直後の幹部であった張麟炳氏は次のように応答している。

(I-7 張麟炳 1994年8月28日午前)

・ 搭套は――あったよ。

・ 解放前と解放後の搭套の変化は――解放前は家畜を搭套した。解放後は互助組と呼ばれた。名前は変わったが内容は変化していない。52年以後変わった。互助組では労働は一緒にしたし、互相帮忙は比較的簡単だった。52年以後一緒に働くにも、土地60%、労働力40%となった。

・ 「地六人四」はいつできたのか――51年に互助組ができてから。

張氏の場合には、明らかに搭套と互助組の内容が不変であることが強調されている。

以上沙井村の応答を紹介したが、おしなべて搭套が互助組に編成替えされたこと、相互協力の内容は厳密には搭套の範囲を超えて、それこそ換工までを搭套の範囲として理解し

ていることなどが、特徴として明記できよう。

②後夏寨

後夏寨での調査は、1993年春と1994年夏に実施された。筆者の問題意識の関係からすれば、94年夏での調査において、互助組の成立過程を質問しているので、本稿では94年夏の調査内容を以下の5例に限定して紹介する。

(Ⅱ－1 馬鳳来 1994年8月13日午前)

- ・50年代のことを覚えていたら教えてほしい。解放以後、土地改革や合作社、大躍進などの状況だ。人民公社運動の様子も教えてほしい。どうして人民公社ができたのかしりたい。馬さんの目で見たことを教えてほしい——人民公社ができた頃、我々は深く理解していなかった。党中央の命令によって起きたのだ。我々は1945年に解放されてから、土地改革を達成した。1947年の修正を経て、政策は明確になり、第一次の路線変更をした。土地が平均化された後、1949年に互助組が成立した。1952年から54年までは初級合作社だった。
- ・あなたの父親は誰と合作社を結成したのか——父は身障者だった。我々の家は、十数戸、具体的には12戸の農家と互助組を結成した。
- ・他の農家の名前は——馬建寅、馬春宣など、組長は馬振平だった。
- ・あなたがたが結成した互助組は、どんな関係の人々が集まったのか。土地面積の大小など関係あるのか——条件が合う者同志だ。あなたに役畜がいて、私に農具があれば、一緒にやれるので、自然と一緒になった。
- ・性格が近い人がいいのか——当然だ。気があわなきゃだめだ。
- ・互助組を結成する時、喧嘩が起きないように考えないのか——それは重要な問題だ。
- ・互助組を結成する時、村長や党支部が組み合わせについて指導しなかったのか——当時の村のリーダーは、馬振平だった。
- ・馬振平は党员だったのか——違う。互助組は党员であるかは関係ない。
- ・どうして馬振平は組長となったのか——当時互助組が成立した時、あるグループは早く成立したが、遅く成立したグループもあり、貧農の多くにはまだ成立していなかった。私は地主でもなく富農でもなく、富裕中農だ。富裕中農は他の先進的な互助組に入れず、落後分子のグループに入った。
- ・馬振平はどんな人だったのか——貧農だ。彼の父親は貧農代表だ。
- ・彼はどうして貴方たちを組織したのか——他の人が皆互助組を成立させたからだ。

- ・では貴方たちの組は一番最後に成立したのか——最後ではないが、遅い方だ。
- ・貴方たちが互助組を成立させた時、村の中にはいくつの互助組があったのか——十数組だ。我々の組が成立してまもなく初級社が成立した。
- ・一番早く互助組が成立したのは——1952年に、李金城が成立させた組が一番早い。
- ・互助組から初級社になったのは、党の指導によるものか——もちろんだ。
- ・初級社に参加するためには、互助組に参加していなければならないのか——20戸の農家は直接参加した。
- ・その20戸というのはどういう農家なのか——状況は同一ではない。ある者は自家の生産条件が良いので、互助組に参加する必要がなかった。ある者は、階級成分が高いので参加できなかった。
- ・生産条件が良くて参加しなかった農家を覚えてるか——中農が多い。王立慶、王金亭などの人がいた。
- ・二人は今どうしているか——王金亭は死んだが、王立慶は存命だ。
- ・王立慶は何歳か——80余歳。
- ・成分が高かった農家は——魏甲木、王延西、李振都、馬振鐸。
- ・皆富農か——馬振鐸だけ地主だ。
- ・貴方は富農中農だが、当時の成分としては高い方か、低い方か——比較的高い方だ。
- ・当時富裕な農家は、互助組に参加できなかったのか、それとも参加するのを感じなかったのか——農業生産力が高い農家にはそれほど加入の必要はなかった。
- ・貴方の父が互助組に参加した時には、村の幹部が指導したのか——単純に動員はされなかった。後になって動員された。
- ・貧農が互助組を作る時には、党員は動員されたか——当然だ。互助組でも初級社でも貧農が中心だ。
- ・ということは党員が中心に運動が起きたわけだね——そうだ。
- ・貧農はどうして互助組に参加したのだと思うか——状況は単純ではない。ある者は革命によって自己変革し、ある者は生産条件が悪くないので集団化を早く望んだし、一部の貧農は、自分が幹部になるので農業労働の時間が少なくなるので参加したのだろう。
- ・当時生産条件が良い農家は、自家労働力で十分だから、皆が互助組などに参加する状況を快く思わなかったのではないか——そうだろう。
- ・当時の富裕中農はどうしたのか——何か運動が起きると、必ず先進と後進ができる。生産条件が良い者はあえて互助組に入りたくないから入らない。初級社が成立した時には皆入社しなければ

ならなかったので、入らざるを得なかった。

・もし運動が起きなかったら、貴方の村には互助組がすぐに成立したか——互助組が成立した時には運動はなかった。党の呼びかけで初級社に参加した時も、運動は起きなかった。1958年に人民公社が成立したが、その前では、57年に反右派運動が起き、地主や、富農、富裕中農など生産条件の良い者に対して、思想的に落後分子だとして教育された。

(中略)

・「搭套」を知っているか——解放前にはいろいろな呼び方があった。私たちには「使具」と呼んでいた。どんなことかという、例えばあんたの家に家畜が一頭、わが家にも家畜が一頭、そしてあんたの家に車、わが家に犁があったとしよう。あんたの家もわが家も一軒だけでは十分に耕作できない時、一緒に家畜や農具を使う。これが「使具」だ。現在では水をくみあげるポンプを何戸かの農家が共同で購入して共同利用している。

・現在では農具は共同で購入するのか——主にモーター付きポンプだ。

・あなたの家にはポンプはないのか——買ったよ。5戸で共同で買った。

・5戸で買ったポンプはいくらだったか——現在で買うとしたら、2,000元前後だろう。我々が購入したのは、5、6年前だったから1,000元余だった。

・購入代金は、5戸でどのように分担したのか——家族数に応じて分けた。

・あなたはいくら負担したのか——2人なので、100元だ。

・他に共同で耕作することは——種まきや収穫、施肥など。

・誰と共同するのか——気の合った仲間や、同族だ。私の場合は、長男と次男を加えた三軒で協力している。

馬氏の応答は次のような特徴にまとめることができよう。第一に互助組に結成には、当事者同志の気心が通じ合うという人間関係が重視されている。この点は、応答の後半部分で語られた、現在の社会生活にも共通している。第二には、互助組は貧農中心に結成されたが、貧農が参加する要因もさまざま、自家の生産条件の改善の目的とする農家もあれば、幹部になって作業時間を減少したことへの対応策の一環として利用した農家もいた。第三に、富裕中農は落後分子として後から結成された組に参加させられたが、結成の中核者は幹部級の貧農農家であった。第四に、20戸ほどの農家が互助組に参加しなかったが、その多くは中農で、富裕中農のように階級成分が高いというので参加を嫌われた者がいる一方、自家の生産諸条件が高く、互助組に参加する必要がない農家もいた。第五に、畜力交換は搭套という名称では理解されていない。

(Ⅱ－2 馬鳳山 1994年8月13日午前)

- ・ 互助組はどのように成立したのか ― 10軒から8軒の農家からでき上がっていた。
- ・ 一番早く互助組を成立させた農家は ― 私の組が一番早い互助組だ。
- ・ 何戸の農家から構成されていたのか ― 12戸、50人。
- ・ 一番早い互助組が成立したのは、農民の自発的な行為か、それとも共産党の指導によるのか ― 党の指導さ。
- ・ 共産党が互助組を成立させる以前には、農民たちの共同作業はあったのか ― 互助組成立以前はない。
- ・ あなたが互助組に参加した時、組員は皆貧農か ― 私が参加した最初の互助組は、貧農や中農で、富農はいなかった。同族同志であったかはわからない。
- ・ 互助組には、貧農は農具など少ないから、助け合わなくてはならないから参加するだろうが、農具などをもっている中農がどうして参加するのか ― 私の参加した組には、5、6戸の中農がいたが、それは統一の精神から互助組に中農を参加させたからだ。
- ・ では当時の中農はいいやながら参加したのか ― そんなものだ。
- ・ 当時は思想教育がされたのか ― 思想教育を経て参加させられたのだ。
- ・ どんな思想教育が庶民になされたのか ― 政府は皆を教育するにあたって、互助組に参加すれば、生活も良くなり、生産量が増大できるといった。
- ・ それは大会を開いての宣伝か、それとも一戸ずつ回って教育していったのか ― 主に会議を開いて教育したのだ。
- ・ 会議には中農も参加したのか ― 皆参加した。欠席者もいた。
- ・ あなたがたの最初の互助組が成立したあと、どのようにして他の互助組が成立したのか ― 政府の命令で参加した者もいれば、自分の意志で参加した者もいる。
- ・ 合作社は、いくつ、どのようにできたのか ― 5合作社だ。初級社だ。
- ・ 何年 ― 1953年。

この馬氏の応答からは、互助組の結成についての政治的要因が説明されている。つまり、第一に農民は共産党の指導を受けて互助組を結成したこと、第二に中農の参加要因にも思想教育を含めて上部機関からの指導がなされており、中農の中にはいやいやながら参加した者がいることである。

ところで「改革・開放」経済の中で、いち早くりんご栽培農家として村を指導して来た李志祥氏とのインタビューは次のようなものであった。

(Ⅱ－3 李志祥 1994年8月14日午前)

- ・まず互助組と初級社の状況についてお聞きしたい。互助組や初級社には村民皆が一緒に参加したのか、さらに農民は互助組や初級社についてどのように考えていたのか——互助組から合作社になる時には、思想的に先進の人が先に参加した。集団経済は、耕作に便利だと考えたのだ。
- ・先進部分とは、貧農か、中農か——多くは貧農で、一部の中農もいた。その他自分で希望して参加した者もいた。
- ・あなたは貧農か——その時は中農だ。
- ・互助組や初級社が成立した時には、一般的には、貧農は土地も少なく、農具も少ないので共同で耕作を希望しただろうが、生産条件が良く、土地も農具もある中農がどうして参加したのだろうか——その頃の土地は皆同じだった。土地改革で土地が均分され、土地がない貧農に土地が分け与えられた。中農はそのままだ。わずかに富裕の者は富裕中農だ。
- ・あなたの参加は早い方か、遅い方か——最初の互助組に参加したから、早い方だ。
- ・どうして参加したのか——互助組に参加したのは家族労働力が少なく、他人の手助けが必要だったからだ。
- ・農具は——農具は十分だったが、労働力が不足していた。集団化以後解決したのだ。
- ・では家族労働力や、農具が十分な中農は、互助組などに参加しなかったのか——ここでは大部分の農家が参加した。参加しない農家は少ない。
- ・どうしてか——集団の方が比較的便利だ。トラクターなどの機械を使って耕作することもできる。
- ・思想教育は関係していないか——関係ある。
- ・どちらが主要な要因か——思想教育が大事だ。この点がしっかりしていないと、必ず個別に経営して、集団化には参加しない。
- ・互助組を作る時も関係が悪くない人同志で結成したのか、階級成分は考慮しないのか——大事なのは関係が悪くないことだ。成分は考慮しなくてよい。関係が悪ければ全てうまくいかない。
- ・互助組が作られる時、幹部は誰と誰というふうに組み合わせについて指導したのか——初めは指導もなかったで自分たちで互助組を結成したが、後になって村民大会を開いて指導した。右派とされた者は参加できなかった。

李氏の応答からは、第一に、貧農の互助組参加の契機が、家族労働力の不足により、他人の手助けを必要としていたという経営状態が反映し、集団化のメリットが認識されていること、第二に、互助組の結成には、仲間となる者の階級成分より、彼との人間関係が優

先されていること、第三に、にも拘らず政治指導ないし思想教育が重視されていることが理解し得る。

次の王氏は、父の王貴三氏が、教員であったため、下中農でありながら、「思想上の問題の打開とため」という理由で、自ら互助組に参加して先進例としての役割の果たさなければならなかった立場から応答している。

(Ⅱ－４ 王玉山 1994年8月14日午後)

- ・互助組が成立した時、あなたは何歳だったか——13歳。
- ・あなたのお父さんが互助組に参加した状況を知っているか——父は最初の互助組に参加した。
- ・お父さんは教師なのに、どうして最初の互助組に参加したのか——文化がある人間は、むしろ先進的な思想を持って活動しなければならない。
- ・互助組を結成する時、幹部があなたの家に宣伝に来たのか——そうだ。幹部が来たのではなく、学生たちが家に来て説得していた。
- ・あなたのお父さんはどのくらいの土地を持っていたのか、当時の階級成分は——下中農で、13畝の土地を所有していたが、詳しいことは知らない。
- ・一番早く互助組に参加するのは一般的には貧農だが、あなたのお父さんは中農であったが、先進的な思想のために参加したのですね——当時大事なのは、労働力の不足の問題で農具などではない。
- ・お父さんが参加した互助組の名前を知っているか——組長は劉希義、組員は王維君、王金城、王雲芝だ。その他に王優運が会計になっていた。
- ・その互助組は何年に始まったのか——自発的に結成されたので、はっきりしない。お互い助け合うために組織化したのだ。
- ・あなたがたの互助組には党員はいたか——まだ小さかったので、誰が党員だか知らなかった。
- ・組員の階級成分は——父は下中農、劉希義は貧農、王優運は中農、王維君、王金城、王雲芝も貧農だ。
- ・あなたがたが初級社を組織した時、反対した者は——皆初級社に加入した。入らなかった者はいない。

解放後長く村の会計として幹部の一員であり、息子が現書記という立場の馬会祥氏は、互助組への参加のテンポを次のように語っている。

(Ⅱ－５ 馬会祥 1994年8月16日午後)

- ・互助組が成立したのは、貧農が中心となったのか、中農は——貧農がほとんどだが、中農もいた。

当初、中農のほとんどは、家畜も農具もあったので、参加した者は少ない。

・では中農が参加していった理由は——参加することを光栄だと感じたからだ。彼らは農具は多かったが、労働力が不足していたので、互助組に参加した。つまり互助組の援助で労働力問題の解決を図ったのだ。

・中農の中で、農具も少なく、労働力も足りない者は、最初から互助組に参加したのか——そう、自然と参加していった。上半期に参加していなくても、下半期になると参加した。そして翌年からは参加した。最後に集団に参加したのは、富裕中農だ。

・では、生産条件の良い中農は、自分たちだけで互助組を作ることは——少しだが、あった。後に合作社が成立した時、村中の者が参加した。

・中農が中心となった互助組も、合作社に参加したのか——そうだ。合作社の生産が増大し、互助組よりたくさん分配されるので。

・初級社ができた時には、村民皆が参加したのだね——地主と富農以外は。

・初級社が高級社に組織されたのは、上級からの命令か、農民たちの自主的な行動か——上からの指示。

・初級社から高級社、そして人民公社と短期間に集団が拡大していくが、もう少しゆっくりとしていたらどうだっただろうか——別に早いわけではない。これは社会の発展だし、共産主義社会の実現のために努力したのだ。

以上の応答から後夏寨の互助組と「共同関係」との関りを理解してみよう。まず解放前の搭套の存在については、複数の応答から確認できる。しかし搭套という語句ではなく、「借用」とか「使具」といった言葉で理解されている。このことは後夏寨では、役畜交換を主とする搭套のみに「共同関係」が限定されているのではなく、過去における井戸や現在の汲み上げポンプの共同利用に見られるように、農業生産全体を通じて、兄弟、親戚、同族、さらに朋友関係などを紐帯として広く「共同関係」が実施されてきたことを物語る。

さらに組み合わせが形成される際の相手農家には、気の合う者とか、近隣の者とかが指摘されている。李氏祥氏のように、階級成分より人間関係を重視する発言も飛び出している。当然その際の人間関係が互助組結成の重要な一要因であったことは否定でしない。

ただ共同出資による家畜購入をめぐる、利用の便宜さ、飼育の煩雑さを中心にトラブルが発生したという応答もあり、互助組に結集した「共同関係」が、「低位な生産力段階における共同化」をめぐる中で存立したことを考え合わせると、中農など生産条件が整っている者などにとっては、できれば個別経営を目指していたのであり、「共同化」はあく

まで農家にとっては生産力構想の中では手段であり、目的ではないことは事実であろう。

なおインタビューの中で、人民公社までの農業の集団化を振り返りながら、現在の生産責任制まで話が及ぶと、後夏寨の農民の心の奥底には、相互扶助の気持ちが強いことが窺える。その際に「共同化」の適正規模を質問すると、「3, 4戸」とか「3～5戸」という回答が多い。その限りでは互助組等の農業の集団化が、貧農を中心とした労働生産性の向上という願望を機軸に結成されたこと、さらに政治教育の結果、やっと参加に踏み切った中農層まで含めて、農民の労働力確保という問題が、当該期の農村にとって最重要課題であり続けたことが理解されるが、適正規模の数値は、あくまで現在の請負制での「共同化」という現実が反映したものであらうと思われる。

③寺北柴村

寺北柴村の再調査は、1994年12月、95年2月、9月に実施され、筆者以外の調査者も互助組に結成については質問した場合もあった。したがって収集した搭套および互助組に関する応答も多いので別表のようにまとめた。

別表、寺北柴村の互助結成についての回答の一覧（含北五里鋪村）

回答番号	調査日	応答者	訪問者	互助組メンバー（本人を除く）関係	互助組の結成時、および参加条件
Ⅲ-1	1994年12月27日、以後94, 12, 27と表記	郝小寿	三谷	郝芹子, 郝四妮, 他一戸, 計4戸 親戚ではないが、皆同族の郷親。	55年に結成。一戸に困難があれば皆で支援する、これが互助組の利点だ。それぞれロバか馬を一頭ずつ保有。当初2.5畝を所有していたが土地改革で18畝を追加。
Ⅲ-2	94, 12, 25・27	郝老艶	笠原	張歪子, 劉瓜子, 郝沙小, 郝黑蛋, 家畜・車と人力。	53, 54年。寺北柴村最初の互助組。 私には家畜や車があったが、人が少なかった、彼らには家畜がなかった。父の所有地80畝を兄弟4人で20畝ずつに分割。
Ⅲ-3	94, 12, 29	張仲(忠)寅	笠原	参加できなかった。	富農は要らないといわれた。ロバ一頭を保有。郝中林と共同で一つの水車があり、ロバに引かせて水車で灌漑をした。
Ⅲ-4	94, 12, 25	郝同順	内山	覚えていない。だいたい4, 5戸。 必ずしも隣同士ではない。	53年か、54年。
Ⅲ-5	94, 12, 25	郝全喜	内山	郝狼子と一緒に、春に綿花の種を撒いただけ、十数日。	その後は別々に合作社に参加。
Ⅲ-6	94, 12, 27	趙歪子	内山	参加せず、直接合作社に入った。	
Ⅲ-7	94, 12, 27	劉宝貴	内山	劉玉德（祖父、所有地は3畝）、劉喜毛、（劉連祥）、劉大賍、劉老丑、劉連生。皆自分の土地がお互いに地続きで、この中に井戸があり、一緒に利用している。	井戸は、互助組成立以前から、劉喜毛、劉連生、劉老丑が使っていた。劉喜毛（所有地10.5畝）劉連祥（10畝）、劉大賍（3畝）、劉老丑、劉連生の土地面積ははっきり覚えていない。
Ⅲ-8	94, 12, 29	劉繼晨	内山	十数戸、井戸を持っていた。	互助組を結成するのは、土地が近かったり、仲が良かったりして、グループを組織したので、同族関係ではない。

回答番号	調査日	応答者	訪問者	互助組メンバー（本人を除く）関係	互助組の結成時、および参加条件
Ⅲ-9	94, 12, 29	劉風書	内山	はじめ3, 4戸だったが、後で8, 9戸と大きくなった。	井戸は二つあった。
Ⅲ-10	94, 12, 27	劉老艶	張	農具がないと家と、人手がない家があり、我々は互助組を成立した。張歪子, 劉瓜子, 郝傻子, 郝(黒)蛋の全部で五家族。	搭夥具と関係があり。自分には家畜や車があるが、労働力がない、相手は農具が足りない。そこで一緒になった。まず1952年互助組に、54年に初級社に、55年に高級社に入った。
Ⅲ-11	94, 12, 25	徐小眼	李	初めは4, 5戸、徐孟祥、崔長勝の家があったが、後の人は思い出せない。	
Ⅲ-12	94, 12, 28	趙傻子	李	趙秀路, 趙二紅。標準は、10戸で一组だったが、実際にはそうならず、2, 3戸だけだった。	気持ちではそれぞれ自分の仕事をするのが良いと思っていたが、「工作隊」が村に入っていて、そんな道を歩かせるから、仕方がなかった。
Ⅲ-13	94, 12, 29	郝鎖子	李	当時はたいへん混乱していて、今日はAと同じ組にしたり、明日はBと同じ組にしたりして、一年、二年間ずっと変わらないということではなかった。	当時、ある家は水車を持ち、ある家は家畜を持ち、ある家は荷車を持ち、あわせると、生産用具が揃って、仕事がしやすくなる。これは協同組合という。今年はこういう様子だが、来年は別の状況になって変わったわけだ。
Ⅲ-14	95, 2, 19	徐孟祥	浜口	5～6戸、徐小和、徐小眼、徐鎖成、徐群山、徐振山。皆近くに住んでいた。生活水準はだいたい同じ。私と徐小和が提案。各戸ともロバー頭を保有。	55年春。最も早く、もっとも先進的だった。仕事が行き届くようになったし、上級機関が資金を貸してくれたので、農具がなければ買うことができ、水車がなければ水車をもらって水利問題を解決できたので、生産量は増加した。
Ⅲ-15	95, 2, 21	徐小和	浜口	5, 6戸。近くに住んでおり、皆徐姓。異姓の混じった組もいたが、関係の良いものが一緒であった。土地が近かったので自由に組織した。	1953年に成立。上級機関＝工作組の呼びかけに応じて、徐孟祥が提案。県から人が派遣されてきて、相互に助け合うことの良い点や、家畜、労働力、農具を調整しあえば、生産量は高くなるし便宜な点が多いと、互助組を宣伝した。
Ⅲ-16	95, 2, 22	徐丑小	中生	徐孟祥の組織した組。徐常子(父)徐小黒ら十数戸。	すぐに初級社になり、高級社になった。
Ⅲ-17	95, 2, 18	徐孟祥	グローブ	十数戸。	村にどのくらいの組があったか覚えていない。
Ⅲ-18	95, 9, 8	劉金祥	三谷	参加しなかった。	1954年12月に人民解放軍に入隊した。
Ⅲ-19	95, 9, 11	張九東	浜口	解放後土地をもらったが、のち農村には両極分化がおこったので互助組を組織した。	
Ⅲ-20	95, 9, 9	郝鎖芹	グローブ	保群、徐孟祥、郝明芹、郝大順。一つの互助組で十軒足らずといったところだ。何軒かで一頭のロバを共同で飼っていた。	土地を一緒に耕し、家畜を共同で飼い、穀物を収穫して分ける。人口に応じて穀物を分けた。農作業は農家単独でやるに越したことはない。人が多くなると心がまとまらない。各自でやるのとは大差がある。
Ⅲ-21	95, 9, 7	張仲寅	内山	井戸を一緒に使うグループが一つの互助組を作ることもある。	互助組を作るのは、第一に政府の指令、第二に共同に井戸を使う関係がある。
Ⅲ-22	95, 9, 8	趙喜鳳	内山	何軒だか覚えていない。覚えているのは、私と兄の趙玉鳳(合わせて14, 5畝)と二人の甥、それに趙新勝(6, 7畝)。別に6, 7畝持っていた人。	土地改革後、政府が互助組を作るように命令した。自分の所属した互助組は、平均すると6, 7畝の土地を持っていた。
Ⅲ-23	95, 9, 10	馮修文	内山	中農であった兄弟4人はすぐには互助組に参加しなかった。	30畝を所有。
Ⅲ-24	95, 9, 10	徐樂祥	内山	伯父の徐坑洞と搭伙計をし、それぞれ保有していたロバを一緒に使用した。井戸も一緒に使った。伯父と一緒に互助組に参加した。	土地が300畝もあり、家畜が2, 30頭いた。搭伙計をしているものは同じ互助組を結成した。
Ⅲ-25	95, 9, 11	郝老艶	内山	井戸を一緒に利用したものと同じ互助組を結成したわけではない。互助組に期間は極めて短く、すぐに合作社に入社した。	互助組への参加は、土地の広さは一定していないが、土地がそこにあるからというだけだ。互助組に入るのは、労働力が足りないからだ。

回答番号	調査日	応答者	訪問者	互助組メンバー（本人を除く）関係	互助組の結成時、および参加条件
Ⅲ-26	95, 9, 13	徐孟祥	内山	上級の命令で互助組を作った。関係が悪くないものが、同じ互助組に参加した。解放前によく手伝いする間柄や、住居が近いもの同志が同じ互助組に入った。一緒に井戸を使っている場合は、比較的一緒の互助組に入ることが多い。	解放前に相互扶助していたグループが直ちにそのまま互助組を結成したのではなく、過去の関係が悪くないから参加したのだ。今まで一緒に共同労働していた人達が、一つの互助組を作る時に、他の人が加わることはめったにない。問題が起きたら幹部が調整する。互助組に期間は短かったので、矛盾が出なかった。互助組のメンバーの生活には差がなく、何か問題が起きても解決できた。大部分の農民は互助組に入ったが、入らなかった農家は農具や自家労働力が充分な人達だ。階級成分は関係ない。自分の農具が充分だったり、思想が悪い人は参加しない。
Ⅲ-27	95, 9, 9	郭蓮	末次	6戸で互助組を作った。	互助組の時には自分達で作業したが、その後は隊長が何をやれといえどその仕事をした。

寺北柴村から得た回答の特徴を次にまとめてみよう。

まず「共同関係に」については、第一に、搭套についてはこの地域では搭伙計とか、搭夥具、さらに単に借用と呼ばれている。『慣行調査』でも家畜の共同飼育を「夥喂牲口」と呼んでいる。⁽¹⁸⁾相手は兄弟、親戚、同族、隣人と広く、両者の感情が重視されている。

第二に、その他の共同関係として、帮忙がある。『慣行調査』でも、家の修理の手伝いである「修房子帮忙」、結婚式の手伝いである「帮喜事忙」、葬式の手伝いである「帮喪事的忙」が張樂卿によって紹介されている。⁽¹⁹⁾

ただ徐小眼によれば、「帮忙にはいろいろな場合がある。農作業や家造りはそうだ。帮忙は互いの労働の多少は考えない。あなたは私に一日、私はあなたに二日やってもいい。

『工換工』は一日対一日で、互いにしてあげる。農作業には限らない。」「本当の『工換工』は互いに対等の量をしてあげる」⁽²⁰⁾と言い、区別があるという。

次に、以上の「共同関係」が互助組の成立にいかに関結びついたので別表の内容を検討してみよう。

特徴として、互助組の結成には、兄弟、親戚、同族、隣人関係、さらに仲間意識、さらにはほぼ等しい農業生産条件、労働力および畜力交換の有無、井戸をめぐる関係など様々な要因が作用していることがあげられる。

ところで互助組結成の第一要因は、前掲の二村と同様に、農業生産力の向上を目指した上級機関からの政治的指導の存在である。徐孟祥氏や徐小和氏の応答から、貧農として政治的先進部分としての自覚が高まった農村幹部の意気込みが読み取れる。一方、富農とされた張仲寅氏が互助組に参加できなかったのも、政治的圧力の存在を物語る。

結成の第二要因には、寺北柴村でも互助組成立以前からの農業生産における協力関係の存在があげられる。搭套などの「共同関係」や、井戸および水車の共同利用もこの範疇で

考えるべき問題だろう。特に低位な生産力段階に止まっていた貧農ほど、土地改革によって新たな配分された土地を経営するためには、搭套、換工などの農業慣行に基づく協力関係に依存しなけりばならなかったという実情がある。この点について、郝老艶氏は搭夥具との関係から互助組の成立を説明している。⁽²¹⁾なお参加農家の多くがロバなどの家畜を保有しているのも、互助組結成に畜力交換の慣習が関与していたことの別証でもある。

また郝老艶氏の語るように、中農層などの生産用具が完備している比較的豊かな農家でも、農業労働力が足りないという現実があり、労働力と農具、家畜の相互利用が必要不可欠であった。

ただ寺北柴村の互助組の規模は、前掲の沙井村や後夏寨の事例と比較すると、比較的少人数で構成されており、また中農部分の不満が少ないように見られる。それだけ政治的圧力が強かったのか、今後の検討課題の一つでもある。

4. 小括

以上沙井村、後夏寨、寺北柴村の三村でのインタビュー記録を基礎に、互助組結成をめぐる諸要因を整理してみた。そこには石田氏も指摘したように、上部機関からの政治的指導が強く関与していた。中農がいやいやながら参加していった様子を回答した農民もいた。

しかしその中農でさえ、さらに「共同化」促進の主体的な役割を果たした貧農でさえ、自家経営における農業労働力の確保のためには、旧来の慣習である「搭套」に見られる相互扶助を機軸とした集団化を押し進めなければならない社会的要因が存在した。

つまり共産党の上からの集団化の強制といえ事実の裏側に、生産力の低位な段階にあった農民にとっては、その生産力の向上のために集団化を認め、その中に活路を見いださなければならない実情があった。従って50年代の華北農民の側には、共産党政府が押し進める集団化の受け皿が存在したのである。

その地域や農民個々の実情に応じて、旧来の農業慣習は拡大解釈され、畜力の共同使用という「搭套」という名称でも、人力交換を意味した換工が含まれるようになっていったのである。このことは華北農民が、共産党の押し進めた農業の集団化を、自家経営の枠内での生産力および生産用具の相互利用という「共同化」の理念で理解し、政策を受け止めたといえる。そしてその「共同化」の中軸には、旧来からの畜力の共同利用による生産力の拡大という慣行が実施される社会として、新中国を受け止めたといえよう。その限りで筆者は、少なくとも互助組段階までは、農民の主体的意思と合致した集団化がなされたと

考える。

但し、社会体制の転換の中で旧来の慣行が名称を異にしながらも持続していくことはさして珍しいことではない。問題は「搭套」等の慣行を軸として結成された互助組に始まる農業の集団化が、いかなる体制転換を実現し得るかということである。この点、前掲の西山氏に見られるように、従来の研究では、集団化とは、すなわち社会主義化という脈絡で単純にとらえ過ぎていたように筆者には思えてならない。無論その後の集団化の規模拡大、人民公社の成立については、互助組の結成から直接に語ることはできない。農民をとりまく政治的要因に注目して、別の機会に検討することとする。

ところで筆者が、1950年代の中国農村社会において、畜力の相互利用から即社会主義体制への転換への基礎構造が形成されたと断言しないのは、社会主義革命後農村の共同化をめぐるボルシェビキと旧来の共同体的慣習との軋轢の中でのロシア農民の実態を描いたN・ワース『ロシア農民生活誌 1917～1939年』の次のような一節を目にしたからに他ならない。

「馬と農具の不足をきりぬけるために、農民は二つの解決方法がある。一つは、より富裕な農民に、報酬をしばしば現物または労働で支払って助けを求めることである。これは、ペドニャークが訴えた解決法である。第二の解決法はポーモシチと呼ばれる相互扶助である。これは、かなり均等な状態にある家族間で実行される。『これはいわば標準的におこなわれうる。したがってウクライナでは、重い犁が二、三対の牡牛でひかれるが、その各々が必要な家畜数を持っていないので、多数の家長が協力することが必要である。こうして集団的に家畜を農具につなぐことはスプリャーガと呼ばれる。』ロシアでは農民の15%がこの型の協力に頼り、ウクライナでは35%以上である。しかしながら一般的には相互扶助は例外的な性格をおびている。『それは、その返済の条件の明らかでない、法律的には請求できないが、道徳的には義務的である、無報酬の労働である。それは、集団的労働、一人の利益のための多数の労働である。それは一日限りである。結局、それは祭りとお楽しみの刻印をおびている。』労働で助けてもらう当人は、その日の全部の食事を提供しなければならない。相互扶助は、労働というよりは楽しみであり、遊びの機会である。相互扶助の機会が多い。相互扶助は、急速になされる必要のある圃場の一定の仕事で、そしてそのためには多数の人手または馬が必要な時に（堆肥の輸送、干し草の取入れ、穀物の束の輸送、脱穀、塩づけで貯蔵するキャベツのきざみ仕事、アマの収穫、麻打ち）おこなわれた。最後の三つの作業は女たちや若い娘たちのポーモシチである。とくにきびしい家庭内の仕事は男たちだけに割り当てられた。すなわちベチカづくり、井戸掘り、または家の移動——イズパは家具のように移動させられる——。相互扶助

はまさに一つの制度、農村における社会生活の基礎をなす一つの制度である。相互扶助によって、農民の世界は物質的貧窮の一部をきりぬけ、賃労働によってつくり出された資本主義的關係にたいする、富める者と貧しき者という敵対的な階級へ分裂した社会の概念にたいする憎しみを表明している。

農民の相互扶助の強力な伝統は、セレドニヤークが、ペドニヤークの貧困にもっともしばしば責任があるのが不運であることを忘れてその怠けぐせを軽蔑し、ペドニヤークにたいして時にきびしい態度をとるのを妨げはしない。セレドニヤークは成功したクラークを尊敬し、彼自身も精一杯富裕になることを熱望している。体制が『怠け者』を支持していることは、中農には不合理のきわみに思われる。権力の方は権力の方で、そのセレドニヤークにたいする態度は曖昧である。セレドニヤークは権力には二つの顔を持つ人物であるヤヌスのように見れる。レーニンは次のように書いている。『中農は、同時に所有者であり、勤労者である。長い間、中農はツァーリズム権力によって、そして資本家によって搾取されて来た。中農はじっと辛抱して来た。それでも所有者なのである。だからこの不安定な階級に対するわれわれの態度の問題は、おそろしく複雑な問題である。』⁽²²⁾

この一節は、「第三章 バトラークからクラークまで」と題する、バトラーク（農業労働者）、ペドニヤーク（貧農）、セレドニヤーク（中農）、クラーク（富農）という農民諸階層の関係を説明した部分に含まれている。従って中農の複雑な立場、さらに中農と貧農の間における相互扶助関係がもたらす資本主義的關係との対立関係を描いている。

共に社会主義革命の後とは言え、ロシア農村と中国農村を単純に比較することは、議論を展開する上で誤解を招く危険が大きい。しかし、ロシア農村で相互扶助関係の中軸に、馬という畜力と農具の相互利用関係が関与していることは、華北農村社会における「搭套」を通した互助の関係を、資本主義的な生産関係の展開と中国における近代社会の成立・発展という課題と関連させて考察する際には、多くの示唆を与えているように思われる。

今後、収集した資料の分析を通して、三村の農業生産構造、解放前後の各農民層の対応、さらに解放後の村落政治の展開を、家族、親戚、同族等の社会関係とも合わせて検討し、改めて華北農村社会における「共同関係」の意味を明らかにした上で、近代社会に成立とともに進化したといわれる「共同体」の解体が、いかなる過程を踏んで進化したのか、さらに「共同体」の残滓はその後の資本主義経済体制の発展を機軸とした「近代」社会の構造にいかなる意味を与えたのか検討しなければならないが、今後の課題とせざるを得ない。

（本稿は、平成7・8年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「現代中国における農業の集団化と『共同体』」（研究代表者 内山雅生）、平成7・8年度科学研究費補助金（基盤研究（A））「戦前

期中国実態調査資料の総合的研究」(研究代表者 本庄比佐子), 平成7・8年度三菱財団人文科学研究費「戦前期中国調査資料の研究」(研究代表者 本庄比佐子)の研究成果の一部である。)。

註

- (1) 1940年代初期に実施された『中国農村慣行調査』の調査村を再調査しようとする計画は、文部省科学研究費補助金(国際学術研究・共同研究), 三菱財団人文科学研究補助金, トヨタ財団研究助成金の援助をうけて, 1990年から1996年までに, 北京市順義県沙井村, 北京市房山区呉店村, 天津市静海県馮家村, 山東省平原県後夏寨村, 河北省樂城県寺北柴村で実施され, その成果の一部は三谷孝編『農民が語る中国現代史——華北農村調査の記録』(内山書店 1992年)として発表した。
- (2) 拙稿「近代化と農村社会」(池田誠他編『中国近代化の歴史と展望』法律文化社 1996年)参照のこと。
- (3) 二瓶貞一・松田良一『北支の農具に関する調査』(華北産業科学研究所・華北農事試験場 1942年)8頁。なお錦織英夫『山東農業と養畜』(国立北京大学附設農村経済研究所 1994年 61頁)にも「経営の零細化にも拘らず, 尚且つ役畜の激減を阻止し得る手段として, 役畜の共有と貸借, 換工の方法がある」と表記され, 搭套や換工が日中戦争の中で戦禍に苦しんだ華北農村で再生産の手段として広く行われていたことが指摘されている。
- (4) 旗田巍『中国村落と共同体理論』(岩波書店 1973年)176頁。
- (5) 拙著『中国華北農村経済研究序説』(金沢大学経済学部 1990年)参照のこと。
- (6) 福武直『中国農村社会の構造』(大雅堂 1946年 464～65頁。後に『福武直著作集第九巻』東京大学出版会 1976年 460～61頁に所収)。
- (7) 註(5)に同じ。
- (8) 西山武一『アジア的農法と農業社会』(東京大学出版会 1969年)325～26頁。
- (9) 石田浩『中国農村経済の基礎構造』(晃洋書房 1993年)49, 66～67頁。なお同様な内容が, 石田浩編『中国伝統農村の変革と工業化』(晃洋書房 1996年)に掲載されている。
- (10) 南開大学歴史系現代史研究室の魏宏運・左志遠・張洪祥の三教授, および祁建民副教授の協力なくしては筆者の調査は不可能であった。記して謝す次第である。
- (11) 中国農村慣行調査刊行会『中国農村慣行調査』(岩波書店 1952～58年。1981年再刊)。
- (12) 『慣行調査』第一巻河北省順義県沙井村調査参照。
- (13) 『慣行調査』第四巻山東省恩県調査参照。
- (14) 山東省平原県県志編纂委員会編『平原県志』(齊魯書社 1993年)参照。
- (15) 『慣行調査』第三巻河北省樂城県調査参照。
- (16) 河北省樂城県地方志編纂委員会編『樂城県志』(新華出版社 1995年)参照。
- (17) 註(5)に同じ。
- (18) 『慣行調査』第三巻52頁。
- (19) 『同上』第三巻52～53頁。
- (20) 1994年12月25日午後, 張思氏の徐小眼氏へのインタビュー。未公表。
- (21) 1994年12月27日午後, 張思氏の郝老艷氏へのインタビュー。未公表。
- (22) N. ワース(荒田洋訳)『ロシア農民生活誌 1917～1939年』(平凡社 1985年)80～82頁。